
幸か不幸か

情報屋 < 孔陽 >

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸か不幸か

【Nコード】

N1295Z

【作者名】

情報屋<孔陽>

【あらすじ】

あー、何て報告しようかな……。まあ、分かりやすく説明すると、本日未明、宮城琴栄は死亡？消滅？いたしました。可愛い神様の配慮により、色々と世界を旅して（死神とかハンターとかetc.）偶に神様の雑用をお手伝いしながら、楽しい？人生を歩んでいこうと思います。

報告します。わたし、死んだみたいです。

ゴロゴロゴロ

ピカッ

ゴロンゴロン

ここ最近雨が降り続いていた。それを私今年大学3年宮城琴栄は憂鬱な気持ちで2階の窓の自室からその様子を見ていた。今だに止まない雨に鬱蒼としながらも、オレンジ色とも黄色とも云えない雷をひたすら眺めていた。

雷の光は見えるが、光と音の間隔ではこちらには落ちてこなさそうだ。と、そう思った瞬間。それは起こった。

ドッシャーン!!.....ゴロゴロゴロ

今迄にない青白い光を放つ雷。いや、もはやこれは電気と言っていいのではないだろうか。兎に角、その青白い雷は物凄い雷鳴を響かせて、琴栄の住む家へと真っ直ぐに落ちてきたのだ。幸い、家には誰も居ず、雷を全身に琴栄浴びただけの被害に終わった。

そして、その琴栄はというと.....

「……何処、ここ」

凄い雷がしたと思っただら、凄い光がして、思わず目を閉じて、その後凄い衝撃を全身が駆け巡ったのは記憶に新しい。

その後、あれだけの衝撃を受けたのにも関わらず、すぐに痛みは引いて、目を開ければ。白、白、白、白の真っ白い空間に一人。いや、何時の間にそこに居たのか。少女が目いっぱい涙を浮かべながら、泣くのを我慢するように必死に目を開きながら此方を見つめていた。

その様子には私は混乱してしまった。突然雷に打たれたと思っただら、今度は知らない真っ白い空間に居て、しかも金髪碧眼の可愛い女の子が今にも泣きそうな顔でじっと見ているのだ。そんな状況に思わず、自分が立っている状況も忘れ、女の子を慰めるように声をかけていた。

「私は宮城琴栄。…何故泣きそうな顔をしているの？」

そう出来るだけ優しく声をかけたつもりだったが、意に反して、目の前の女の子はもつと顔を歪めながら、辛うじて出て居なかった涙をポロポロ、と今度は水が決壊したかのように泣き出してしまった。

「うわああああああん、あああうわあああん」

「えっ・ちよ、ま、ええ!？」

それに一掃混乱する私は、なんとか目の前の女の子を泣き止ませようと、優しく抱きしめながら背中をぽんぽんとリズムよく撫で続け、ひたすら少女が落ち着くを待つ。

それから、あやし続けて15分程……

なんとか泣きやんだ女の子は、なんとか落ち着きを取り戻したよ
うで、可愛らしい瞳を真っ赤にさせながら小さく

『……………ごめんなさい』

と、呟いた。何が「ごめんなさい」なのか。私にはよく分からな
かったが、きつとあやされた事にだろう。と勝手に判断した。

「大丈夫だよ。気にしないで」

そう安心させるように笑顔を浮かべながら言う私に、女の子は違
うというように何度も首を横に振るった。

『ち、がう』

「えっ？違うの？」

驚く私に、女の子はまたも悲しそうに呟いた。

『わたし、貴方を殺してしまった』

「は？」

『わたしの力、暴走して、かみなり　ヒクッ』

そこまで云うと、また泣きそうにしゃっくりを出す女の子に私は
混乱しながら、なんとか話を理解しようと、少女を宥め、詳しく話
して欲しいと頼んだ。

そして、1時間後……………

「つまり、私は神様である貴方の暴走した力。つまり、あの青白い雷？に直撃して私の住んでいた処から存在ごと消滅した、と」

『はい』

「しかも、予想外の死に私は輪廻の輪からも外れ、生まれ変わりも出来ない、と」

『……はい』

「さらには、貴方の神の力が少しとはいえ、あろうことか私の魂に宿ってしまった、と」

『……はい』

「外すことも出来ない、と」

『……はい』

「なんとも、本末転倒だね……」

『うつつ、……はい』

「『……』」

状況を把握したところで、私と少女の間に暫くの無言が続く。しかし、それを真つ先に打ち破ったのは私だった。

「で、私今後どうすればいいのかな？」

『え？』

よつこらしよつと、腰をあげて立ちながら言う私に、予想外の反応だったのか少女は驚きを露わに、疑問を口にした。

「いや、え？じゃなくてね。私このままじゃ転生も出来ないみたいだしさ。どうすればいいのかわかって」

そう、驚いたままの女の子に言えば、急に慌てだした。

『あ、そ、それは一応此方でも考えてあります。でも、本当にいいんですか?』

「ん?何が?」

少女に背を向けて、凝り固まった身体を伸びをしながらほぐす私に、少女は問いかける。

『わたしの責任とはいえ、貴方から家族も友達も奪ってしまったのですから、恨みごとの1つや2つ覚悟していたんです』

「ああ。そういう事ね」

伸びをしていた腕を下げる。少女は得に気にした風でもない私に疑問が浮かんでいるのだろう。だが、

「まあ、未練がないっていったらそうでもないんだけど。でも、何でかな…」

少女に背を向けて立っていた私は少女に振り向くと、私に今できるだけの笑顔を向けた。

「私は君を恨んだり、責めたりできないんだ」

それに、目を見開く少女。

「私は自分でいうのもなんだけど、変わった子でね。私は2歳の頃から自我を持って生きてきた。お陰で大人や世の中の汚い部分も、勿論綺麗な部分も多く見てきた。だからか、私はちよっと、いや、かなり達観した子になってしまっただけね。」

表では誰にも悟られないように子供らしく振舞っていたよ。裏ではほとんど夢も希望も荒んでいってしまったけどね。…お陰で、周りは私を手の掛らないいい子だと褒めはやした。それと同時に心が冷めきつてもいったけど。

やがて、私は冷酷さをも持つようになった。普段身内には優しいが、それに害をなす者には容赦をしなかった。私から離れて行く者が出て、私は引きとめもしなかった。そんな頃私は自分が怖くなつたよ。私はこの心に蔓延っている冷たい何かが、いつしか取り返しのつかない何かを壊してしまうのではないかとね。

そんな恐怖からか、私は他人の心に酷く敏感でね。君から真の後悔の念が伝わってくる。私の為に本当に悲しんでいることもね。それが分かるから私は君を恨んだり、責めたりすることが出来ないんだ」

話終わると少女は、またも泣きそうな顔をして、俯いていた。そして、小さく『ありがとう』という声が聞こえてきた。私はそれに、「うん」と応えるだけで、俯く少女の頭をやさしく撫でてやるのだった。

5つのチカラ

お互いに理解し合えたことで、私は改めて少女と向き合った。

「改めまして、私は宮城琴栄^{ミヤシロ・コトエ}。琴栄でいいよ。貴方は？」

『わたしは、貴方がたの住む 地球 ? 000981423を管理している管理者。貴方がたから云う神のようなモノで、名をサシャーリ・ルメルディアと言います。サーシャとでも呼んでください』

なんとも堅苦しい自己紹介だが、この子の名前が分かっただけで良しとしよう。

「おk。じゃあ、サーシャ。私は今後どうすればいいのかな？」

『はい、琴栄さんには大変申し訳ないのですが、異世界を幾つか自由に周って頂き、偶にわたくし共【神の使い】として、お手伝い頂きたいのです』

「え？」

何か今不穏な言葉を聞いたような……

「えっと……、ごめん、よく聞こえなかったんだけど、後半部分なんて言ったの？」

『…偶にわたくし共【神の使い】として、お手伝い「まったー!!」…はい?』

セリフの途中で遮ってごめんね。だけど、そんな怪訝な顔で見てくださいないで…

「何故、私が神様の手伝いを?しかも、異世界を幾つも巡るってど

「ういう事!？」

『あー、これもまた説明しにくい事なんです。実は……』

「はあああ!？最近の違法召喚魔法で召喚される人間の数が急増？
更には優秀な人材を他の異世界の人間に奪われて、帰ってこない！
？」

あまりに突飛過ぎる上に、話が私の斜め上にあり過ぎて若干ついていけないが、話の内容をなんとなく理解して、それが大変な事なのだということは分かった。そんな私に、サーシャは尚も話を進めてくる。

『現在、他の異世界機関でも大変深刻な事態になっておりまして、
私たちがいくら邪魔しようと画策しても、干渉できる制度に限度があり、中々思うような成果が得られないのです。』

以前なら、きちんとその世界の管理者が他の世界の管理者の許可を取って、優秀な人材を無事に帰還させるという規定に沿って行われていたのですが。どうやら、最近の神官や巫女たちは神（管理者）の信託（声）がきちんと聞こえていないようで、勝手に他の世界から人間を召喚させては、魔王やら戦争やらに駆り出して、そのまま帰させない、返さないという状況が増えているんです。

他の世界から召喚された者は、呼ぶだけなら才能ある人間にも出
来ますが、返すには我々管理者の力とその世界の陣に対するタイミ
ングが必要なのです。ですが…」

「今の神官や巫女さん達にこっちの声が聞こえてないって時点で、
タイミングが合わないのはしょうがないよね…」

『…そうなんですよ。お陰で、優秀な人材が集まる世界では、全体
的に過疎化や文明停滞が進行してしまっていて。このままでは、い
つか人類崩壊。果てや、絶滅危惧種になってしまいます』
「ええ！！これって、そこまで深刻なのっ!？」

今まで人事のように聞いていたが、絶滅するという言葉には流石
にヤバいのではないかと、他の世界のことながら心配になってきた
私だった。そんな私をよそにサーシャの説明は続く。

『勿論ですっ!!…わたし達管理者は管理をする上で、この場を離
れるわけにはどうしてもいけません。ですがっ!このような事態、
これは世界管理協会第一 地球 管理局務長としては放っておくわ
けにはいきません!そこで、琴栄さんの出番なのです!…!』
「はっ」

何故ここで私の名が呼ばれるのでしょうか?…非常に嫌な予感が、
こうビッシバッシ来るのですが。どうなのでしょう?か、みなさん。

今迄熱の籠った弁舌で、力説していたと思えば、今度は可愛らし
い見た目に反して鋭い目を私に向けてきた、サーシャ。私の背中に
冷や汗が流れる。

『琴栄さんは、今偶然にもわたし達の力を魂に宿しています。不慮の

事故とはいえ、こんな逸材は他に稀を見ません！」

「へ、へえー、そうなんだ。」

そう言っつて、なぜか私の両手をガシツと掴むこの手は何なのだろうか。そして、今だに冷や汗が止らない。ここまで来ると何かもう、ホント嫌な予感しかしないのだ。

『普通なら私たち管理者の暴走した力をその身に受けて、魂まで消滅しなかったのはもう奇跡としか言えません！更にはその力を己の魂へと刻み込み、変換した琴栄さんの魂は、人間と神との間に出来た、正に【神子】と言っつていい存在なのです！！』

…今この子、サラツと前半とんでもない事を言いませんでしたか？；；

『そんな琴栄さんは、まだわたし達の力を上手くコントロールする事が出来ていません。その為、貴方が知っている世界で、力のコントロールの仕方を身につけ、更には戦い方を学んで頂きます。急に異世界に飛ばしても、戦い方を知らなければすぐ死んでしまう恐れがありますので、それは避けねばなりません！…何せ、この事態を收拾出来るのは最早貴方だけなのです！琴栄さん！！』

なんか、いつの間にか話がでかくなっている気が……

「…あー、とりあえず。この話っつて最早決定事項だよ。私に拒否権なくない？てか、断ったら断ったで恐ろしい事になりそうなんだけど」

『………そんな事ありませんよ』

「否定するならもつと早く答えてほしいな。セリフとの間が空きすぎだからー」

とりあえず、私に拒否権はなく、異世界行きは決定事項のようだ。思わず、この先の事を少し考えて気が重くなった。そんな重要な仕事、私なんかに務まるのだろうか。まあ、決まってしまった事はしょうがない為、やれる事はやるうとは思うが…話を聞いてると中々不安が拭いきれない。

そんな私を知ってか否か。サーシャが今度はその力に関しての説明を始めた。

『まだ琴栄さんには説明していませんでしたが、琴栄さんが魂に刻み込んだその力はおおよそ5つのエネルギーで出来ています。1つは霊力、2つ目は魔力、3つ目は気、4つ目は念、5つ目はチャクラ。』

琴栄さんにはこの各5つの能力が特化した世界へ行って頂き、その5つ全てを己の力でコントロールする事を前提に力を身につけて頂きます。それぞれに特化した世界は出来るだけ、琴栄さんが知っている世界。アニメとか漫画、映画の世界で探しますので安心して下さい。全く知らない世界よりはまだマシだと思しますので』

うーん。なんかどれも聞き覚えのある力ばかりのような……………つか、

「なんちゅう、チート」

いや、流石神様の力とでも言うべきなのか一部とはいえ、5つも能力があるってどんだけよ。

『まあ、万能ではありませんが。これだけの力があればそう簡単に

死ぬ事はないでしょう……たぶん』

最後のところだけ、なんだかすっごい不安になるんだけど!!

『一部とはいえ、神の能力を継いでしまった魂では普通の人間の身体では耐えきれません。ですので、此方で身体は用意します。希望の容姿などがありましたら、今のうちにおしゃってください』

「えっ? いいの?」

『はい。琴栄さんの元々の肉体は私の力で消滅させてしまったので、お詫びです。何でも言うってください』

「え? じゃあ、私って今魂だけの姿なの?」

驚いて、改めて自分の姿を見ってみるが、たいして変わった処は見受けられない。

『今この空間に居る限り、琴栄さんの姿は以前の姿のままの形を保っています。間違いなく今の琴栄さんは魂だけの存在ですよ。その姿になっているのは琴栄さんの魂が以前の身体の記憶をまだ持っているからです。魂は云わば人間の記憶メモリーとでも認識していただいて結構です』

なるほど、なんだかよく分からないが、機械というメモリーカードのようなものか。

『それで、容姿はどう変えますか?』

「うーん。まあ、あえて言うなら【夜桜】みたいなイメージ? がいいかな。日本の美? って言うの? まあ、なんかそんな感じでお願います。あまり、派手じゃない方がいいな。勿論、黒髪黒目で」

『…凄く抽象的ですが、ご希望とあらばなんとかしましょう。…ふふふ、徐々に腕がなります』

ゴキツゴキツゴキ

そう言って、凄く楽しそうに手を鳴らしながら何時の間に持っていたのかパソコンらしきものを操作しながら、ひたすら画面を見つめぶつぶつぶつと呟き始めた。

この時の私はまだ知らなかったのだ。まさか、この時の判断がすでに間違っていたなんて。そう、このサーシャがこの世界では知らない者はいない程に手腕の持ち主で、夢中になると周りが見えず、己が満足するまで完璧を追い求めてしまう、一種の病気のような特性を持っていたとは。

更に、世界でも2つとない【天才敏腕技師・サーシャ】の異名まで持っているとは…。その結果、己の身体となる肉体がとんでもないことになっているなど、この時の琴栄は全くと言っていいほど知らなかったのだ。この後、もっと詳しい詳細を述べておくべきだったと、深い後悔に悩まされることになるなど……。

いや、もう十分チートじゃね？

サーシャがパソコンに向かい始めて、どれくらいの時間が経ったであろうか。10時間くらいは経っているのではないか。いや、下手をすると1日経ってしまったのかもしれない。この空間では何処を見渡しても白一色の為、時間の経過を確認する事は非常に難しい。それに、今魂だけの姿だからなのか、食欲も睡眠欲求もないようだ。

今だにパソコンの前から離れる気配のないサーシャの邪魔を、出来るだけしないように琴栄は床？に座りながら目をつむり、今までの情報を脳内でまとめあげることにした。

それから更に時は経ち……

『よしっ！琴栄さん、身体の方完成しましたよ！完成度としてはわたしの今迄のトップ5に入るくらいの出来ですね！きちんと希望に添えていると思います。ついでに、身体的特典も幾つか付けておきましたので、アチラの世界に行った時にでも確認してください』
「ありがとうございます。お疲れ様」

いきなりパソコンから顔をあげたと思うと、どうやら私の身体は出来たようだ。それには普通に私も嬉しいので、サーシャと一緒に喜ぶ。そして、サーシャはこの際だからと、私に関する項目を早めに決めて行くこうと思ったようだ。

『さて、身体の方は後ほど世界に転移すると同時に送りますので、他の事もこの際ぱっぱと決めて、終わらせましょう』

「そうね。あと、何を決めればいいの？」

そう床に胡坐をかきながら応える私に、サーシャも私の前にちょこんと座る。

『そうですね。とりあえず、此方の責任で貴方を消滅させてしまっただお詫びといっってはなんですが、幾つか可能な限りの願い事を叶えたいと思います』

「…ふむ。じゃあ、私の家族の幸せをお願いしたいかな。贅沢は言わないから、老後まで安心して暮らせるだけの幸せを送ってほしい」
『…わかりました。他にありますか？』

一瞬悲し気に顔を暗くするサーシャだったが、すぐに立ち直り笑顔を見せる。

「そうだなあー。幾つか聞きたいことあるんだけど、まずは私から行く世界ってもう決まった？」

『ええ、だいぶ前にメールで行先が送られてきました』

「へー、ちなみに何処？」

『えっと、ちよっと待ってくださいね。確か、このファイルに入っていた筈…っと、あった。これですね』

そう言って、先ほどのパソコンを操作しながら目的のモノを見つけたらしく、分かりやすく説明を始めた。

『1つ目の霊力では、BLEACHという処ですね。2つ目の魔力はHalley Potter、3つ目はドラゴンボール、4つ目はhunterxhunter、5つ目はNARUTOの世界ですね。わたしはあまりどれも聞いたことない世界ですけど、琴栄さんはご存じですか？…って、どうしたんですか、琴栄さん』

サーシャの言葉を聞いた私は胡坐をかいたまま、思わず身体を地にひれ伏せさせてしまった。その私の様子にサーシャが慌てたように声をかけてくれながら、心配させないようにゆっくりと身体を起こす。

「い、いや、どれも聞いたことある世界で安心したと言っべきなのか、思いつきり死亡フラグだと言っべきなのか。……確かにあの5つの力を聞いた時に、若干こうなることは予想してはいたけどさ、うん」

そう答えながら遠い彼方を見つめる私を誰が責められるだろうか。特にドラゴンボールとかないだろ。思いつきり、死亡フラグだよ。フリーザとかサイヤ人とかさー、ないよねー。あれ、もう化け物並だよ。即死亡ですよ。なに、私に死ねとおしゃっているのか。そうか、そうなのか。へー

つと、そろそろ現実に戻らねば、最早これは決定事項。私に拒否権はないだろう。ちよつとした諦めを滲ませながら、身体を起こして改めてサーシャに尋ねる。

「でさ、その世界に行くに当たって、幾つか質問があるんだけど、いいかな」

『いくらでもどうぞ』

「じゃあ、遠慮なく。まず1つ目、世界を周るって言うってるけど、その際の時間軸はいじれるの？」

『無理ですね。何時どのタイミングであちらの世界に着くかは、わたしでは操作できません』

「…そう。じゃあ、2つ目。あっちに着いた時の私の身分証とかど

うなるの？身分証がないと身動き出来ない世界だってあるでしょう」
『ああ。それら全ては此方で手配しますので、心配ありませんよ。
例え、知らない世界に落ちたとしても、各世界の管理者が貴方の身分証を手配してくれる事になっていきますから。必要ならば住居も簡単に手に入りますので、そのつど管理者へと連絡をとってください。ただし、我々が発行出来るのは身分証だけ、何かしらのライセンスはご自身で取得して頂くことになります』

いや、もう身分証明してくれるだけで、十分ですよ。めっちゃ親切や、管理者の皆さん！！ちよつと感動してしまった。

『他に聞きたい事はありますか？』

「あ、ああ。えっと、3つ目。たぶんこれは予想でしかないけど、自給自足？」

『勿論です』

「ですよねー」

がくっ

首が思いつきり下へと向く。世の中そんなに甘くないよね。勿論、分かっていたとも！！

そんな風に落ちこむ私に何を思ったのか。サーシャは少し困った顔をしながら、嬉しい提案をしてきた。

『しかし、今回琴栄さんは初めての異世界の旅ですから。初めのうちの1年は此方で給金を出しましょう。いずれは、1つの異世界解決毎にその働きに見合った給金が支給されるようになります。もしかしたら、修行中によその世界から緊急の連絡が入るかもしれません。ですが、その時はそのままその管理者の指示に従って、動いてください。どの管理局でも貴方の命の保証をしますので、管理者自体が貴

方を傷つけることはありません』

「ん、了解。」

『後は何かありますか？』

「うん、話聞いて思ったんだけど、その私が稼いだ給料は他の世界だと使えない場合があるよね。だから、どの世界に落ちてもすぐ生活できるように小型で持ち歩けるくらいの【換金】アイテムがあったらくれないかな」

『…なるほど、そこまでわたし共の頭はまわりませんでした。確かに、そうですね。琴栄さんの場合は各世界を周るのですから、当然通貨も違いますね。…分かりました。此方のアイテム開発研究機関に問い合わせてソッコで作らせますので、暫くお待ちください』

そう言うのが早いか、これまた何処からか出てきた携帯を片手に何処かへと連絡をつけ、一言一言告げるとブツツと通話を一方的に切った。そんなサーシャはニッコリと可愛らしい笑顔を私に浮かべた。

『今、ソッコで作らせていますので、出来あがるまでお茶など飲んで、もう少し詳しい説明をしましょうか』

「……………うん、そうだね」

ここは、あえて突っ込まないよ？いや、ホント。なんかちょっとサーシャって腹g『何か？』 何でもありません！！

『それでは、改めて説明しますが、もう質問などはありませんか？』
「うん、今のところそんなだけかな」

『分かりました。では、こちらに。お茶を用意しましたので、飲みながら話しましょう』

そう言っただけで連れられた処はさして離れていない場所で、もうすでにツツコム事に疲れた私は、平然と何時の間にあつたのかわからない、白い可愛らしいアンティークテーブルと対の椅子へと腰掛けた。そして、すでに置かれていた湯気の立つ紅茶を啜りながら、私たちは話し合いを始めた。

『さて、おおまかな琴栄さんの仕事内容なのですが、琴栄さんには他の世界へと赴いて頂き、無断召喚をした者たちから召喚された者の救命と元居た世界への帰還を手伝ってほしいのです。更にはその世界にある召喚魔法の破壊、もしくは封印をして頂きたいのです。』

どの世界がどのくらいの人間を召喚しているかはまだ調査中ですので詳しい事はわかりかねますが、同じ世界で間隔を置かず何度も召喚している世界もあります。まずはその世界から周って頂きます。出来るだけ早く。その世界の調査が終了次第、例え修行中であろうと、琴栄さんには此方を優先して頂きます。よろしいですか？』

「…了解。ついでに覚悟も、早めにつけておくよ」

そう言う私に、サーシャは驚きを露わにしたかと思うと、次の瞬間にはその可愛らしい顔を苦渋の表情に変え視線を下げる。

『……気付いてらしたのですか』

「まあ、ね。同じ世界からそう時間を置かずに召喚って、大抵そういうのは何らかの目的のために人を集めているか、もしくは……何らかの理由で使い物にならなくなった。のどちらかだろうからね」

私は手に持っていたカップと静かにソーサーへと置くと、サーシヤへと視線を合わせた。

「今のところ私しか居ないんでしょう」

『……はい。わたし達の力を一部とはいえ持った琴栄さんならば、いくら世界を跨いでも周りに影響を及ぼすことなく、召喚された者を返すことが可能です。その上、琴栄さんにはわたし達の声が無効にいても聞こえるようなので、この仕事は琴栄さんにしかできません。どうか我々に協力をしてください』

そう頭を下げるサーシヤを見やりながら、私は困った顔をする。とにかく、早く顔をあげさせるように話を振る。

「別に、断ろうなんて思ってないよ。だから、頭を早くあげて」

そこで、ようやく頭をあげるサーシヤ。

「ここまで話が進んだら、もうやるしかないでしょ。私もあんな話聞かされて、協力出来る力があるのに。はい、そうですか。と尻尾巻いて逃げられないよ」

私の言葉に、再び出会った頃のように目の縁に涙を溜めるサーシヤ。震える声で

『ありがとうございます』

と、一言だけ告げられた。その後は、私がこれから行く世界はどういった処なのかと言う話題になり、結局開発局から『完成した』という連絡が入るまで、その話題で盛り上がったのだった。

『他に必要なモノとかありませんか？大丈夫ですか？』

「大丈夫だよ。サーシャ」

開発局から連絡が入ってから、ではそろそろ出発しよう。という頃、サーシャはまるで我が子を心配するようなセリフを繰り返しては、私も同じセリフでもって返している。こんな事が何回か続いているお陰で、いまだ出発出来ない。

あと、これは余談なのだが、サーシャはこう見えてもわたし達の何千倍も生きている。そのため、口調も自然としっかりしたモノになっっているようだ。

最初に出会った頃のあれは、サーシャがこの任に就いて初めての事で動揺してしまい、何故が精神のコントロールが効かず、あんな事になっただけだ。

まあ、そんな事はどうでもいいのだけど…

「いい加減、そろそろ出発させてほしいんだけど……」
『うっ。…だって、心配なんです！琴栄さんは今の能力だけでいいと言いましたが、やはり不安です！こちらで、幾つかピックアップさせてくださいね』

そう言っつて、またもや小型の機械で操作し始めたサーシャを私は慌てて止めに入る。

「いやいやいや。今のままでも十分チートじゃないですかっ！（まだ、コントロール出来ないけど…）これ以上何を増やせと!？」

言いながら、サーシャに詰め寄るが、サーシャは手元の機械に入力し終えたのか。表情をニソツマリと満足そうに歪めた。

『残念でした。もう、入力済みです。取り消しは出来ません。…あとは、転移すると同時に魂へと書き換えを行うだけです。書き換えるの影響により、あちらに着いてすぐは軽い眩暈と高熱が暫く続きますので、十分気をつけてください。 それでは、転移させます』

私が抗議の声をあげる前に、サーシャは何やら呪文と空中に浮いたタッチパネルを素早く操作しながら、口早に説明する。やがて私の身体から黄金色に輝く光が淡く放たれ、次第にその光は強みを帯びていき、目も開けられなくなつた。あまりの眩しさに、瞳を閉じたと同時にシュッパツっという音と共に、先ほどまでの白い空間から私は消えてた。

私が消える瞬間、サーシャが『また後ほど、お会いしましょう』
とい声だけが、その時の私に聞こえた最後の言葉だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1295z/>

幸か不幸か

2011年12月7日04時50分発行